慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	翻訳 ペトルス・ ニコラウス羅訳『アリストテレスの神学』第三章・第四章
Sub Title	The Latin version of the “Theology of Aristotle”, chs. 3–4
Author	堀江, 聡(Horié, Satoshi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 No.20 (2005.) ,p.17- 48
JaLC DOI	
Abstract	ここに邦訳する世界初訳のテキストは，1519年にファウェンツァ出身ピエール・ ニコラ・ カステッラーニによってラテン語に訳された『アリストテレスの神学』全14章のうちの第三章・ 第四章である。この書は錯綜した素性をもつ。紀元3世紀後半，プロティノスによってギリシア語で記された『エンネアデス』の後半部分，第4 ～ 6『エンネアス』の翻案であるが，これとは別の， 9世紀前半バグダードで成立した「流布版『アリストテレスの神学』」と呼び慣わされるアラビア語の翻案もある。後者の出自にすら定説はなく，世界的に議論が喧しい現状であるが，前者の素性はそれに輪をかけて謎に包まれている。研究が進捗しない原因として，このラテン語版の近代語訳が一つもないことが挙げられる。さらに近代語訳がない理由は，ラテン語版に先行し，全体の約3/4残存するいわゆるユダヤ・アラビア語（ヘブライ文字表記のアラビア語）版の校訂（プラス翻訳？）をフェントンがかなり以前に予告したにもかかわらず，未だ完了していないことによる。流布版は全10章であるのに対し，ラテン語版は14章からなるので，『アリストテレスの神学』の「長大版」（longer version）と称されている。ラヴェンナのフランチェスコ・ ローズィがダマスクスの著名な図書館で発見したアラビア語写本を，キプロス出身のユダヤ人医師モーセス・ ロヴァスを雇ってイタリア語，ないしは粗雑なラテン語に訳させたものを，ニコラが彫琢することによってラテン語版が成立した。それをさらに洗練されたラテン語に移したジャック・ シャルパンティエの訳もある。流布版が長大版に先行するという説が優勢ではあるが，長大版から流布版に移行したという主張が消えたわけではない。長大版の研究はまだ緒に就いたばかりなのである。 底本には，Sapientissimi philosophi Aristotelis stagiritae. Theologia sivemistica philosophia secundum Aegyptios noviter reperta et in Latinumcastigatissime redacta, ecphraste Petro Nicolao ex Castellaniis, Roma, 1519を用い，

常時Libri quattordecim qui Aristotelis esse dicuntur, de secretiore partedivinae sapientiae secundum Aegyptios, per Iacobum Carpentarium, Paris, 1571を参照した。底本の二コラ版は句読点が不正確で誤植も散見されるので，シャルパンティ工版を援用しつつ文脈を解釈しなければならなかった。流布版『アリストテレスの神学』にみられない箇所は太字で明示した。ただし，解釈者の視点の差によって，太字箇所の確定は議論の余地のないものとはなりえないことをお断りしておきたい。私の立場は，哲学的に重要で長大版に特有な思想を識別できれば，それで充分というものである。［　］内はフォリオ数である。言うまでもないが，見開きにすれば，r は右頁，v は次の紙の左頁になるのは注意を要する。｛｝内は文意を明確にするための，訳者による補足である。 今回訳出した長大版第三・第四章で注目すべき更新は，第一・第二章でも注目したように，流布版以上に『エンネアデス』の新プラトン主義にアリストテレス的要素を附加している点である。たとえば，流布版の「質料」や「知性」を，それぞれ「第一質料」［15v］（cf.［19v］）と「可能知性」［22v］へと増幅しているのである。そして，たんにアリストテレス的学術用語を使用するだけにとどまらず，［17r］においては，流布版が与えた「肉体の完成」という，魂のいわば省略的定義を，「器官をそなえた自然物体の現実態」とすることによって，『魂について』B巻冒頭のアリストテレス本来の定義を正確に踏襲する文言に書き改めている。もっとも，知性だけでなく魂全体を不滅で離存可能な現実態とすることによってアリストテレスに背き，流布版同様，プラトニスムを堅持する側面も急ぎ指摘しなければ，不公平となるであろう。アリストテレスではその意図が不分明であった船乗りと船の比喩は，騎手と馬の対も加えられて，魂の肉体からの離存性を暗示するものと解釈されるに至る。 魂が睡眠時には肉体から離脱し予言と啓示を受けるという加筆は，長大版翻案者の思想的背景を推測させるものとして興味深い。［23r］でも，霊的なものどもが神的なしかたで啓示される対象であると言われている。ひと・ものの繊細な内面の洞察を「秘された知恵」（sapientia arcana）と呼び，秘された知恵を考察するこの書物を自ら『神秘哲学』（philosophiamystica）［22r］と銘打った著者のうちでは，啓示と神秘的洞察はいかに交錯するのであろうか。 それはさておき，今回訳出した範囲内で指摘すべき最たる革新は，［14v］に見られる，神が言葉（verbum）を媒介にして知性を創造したという主張であろう。神と知性の間にべつの存立を仮設しない点では，流布版は『エンネアデス』から逸脱していなかったからである。『エンネアデス』にも流布版にも対応箇所をもたない長大版特有の思想として，創造主と知性の間に措定される「言葉」（kalimah，λόγος）の教

	説がボリソフ以来夙に指摘されてきた。これはおそらく，万物を命令形「在れ！」（kun）の一言で創造する神の言葉であり，神の意志，力，命令，知と関連するかもしれない。前回訳出した第一章［1v］では，その種の「言葉」という術語は見当たらないものの，神と知性の間に「もろもろの叡智」（intelligentiae）が措定されていた。以後の章でも，この新傾向の展開は見逃してはならないであろう。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20050000-0017

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

翻訳

ペトルス・ニコラウス羅訳『アリストテレスの神学』第三章・第四章

堀　江　　聡　訳

解題

ここに邦訳する世界初訳のテキストは，1519年にファウェンツァ出身ピエール・ニコラ・カステッラーニによってラテン語に訳された『アリストテレスの神学』全14章のうちの第三章・第四章である[(1)]。この書は錯綜した素性をもつ。紀元3世紀後半，プロティノスによってギリシア語で記された『エンネアデス』の後半部分，第4～6『エンネアス』の翻案であるが，これとは別の，9世紀前半バグダードで成立した「流布版『アリストテレスの神学』」と呼び慣わされるアラビア語の翻案もある[(2)]。後者の出

(1)　第一章・第二章の拙訳は，「ペトルス・ニコラウス羅訳『アリストテレスの神学』第一章・第二章」，『西洋精神史における言語観の変遷』，慶應義塾大学言語文化研究所（慶應義塾大学出版会），2004年，115–145頁に掲載されている。

(2)　流布版『アリストテレスの神学』全10章の邦訳は以下の紀要で発表されている。第一章（岩見隆・高田康一・野元晋・堀江聡訳）『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』13，1998年，123–141頁。第二章（岩見隆・高田康一・木下雄介・堀江聡訳）『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』30，1998年，219–240頁。第三章（岩見隆・高田康一・木下雄介・堀江聡訳）『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』14，1999年，55–69頁。第四～第六章（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・堀江聡訳）『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』31，1999年，115–154頁。第七章（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・堀江聡訳）『慶應義塾大

自にすら定説はなく，世界的に議論が喧しい現状であるが[3]，前者の素性はそれに輪をかけて謎に包まれている。研究が進捗しない原因として，このラテン語版の近代語訳が一つもないことが挙げられる。さらに近代語訳がない理由は，ラテン語版に先行し，全体の約3/4残存するいわゆるユダヤ・アラビア語（ヘブライ文字表記のアラビア語）版[4]の校訂（プラス翻訳？）

学日吉紀要　人文科学』15，2000年，92–106頁。第八章・第九章（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・野元晋・堀江聡訳）『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』32，2000年，121–186頁。第十章（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・野元晋・堀江聡訳）『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』33，2001年，161–205頁。序文・問題一覧（岩見隆・大川京・高田康一・木下雄介・野元晋・堀江聡訳）『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』17，2002年，189–211頁。流布版『神学』には，明白に認知されているかぎりで，文体面でも術語面でも類似した二人の兄弟がいる。『（正体不明の）ギリシアの賢者の言葉』と伝ファーラービー『神学論攷』がそれである。この両論攷は流布版『神学』と相俟って，原『神学』を想定せしめる。三者はいずれも『エンネアデス』の改作であるが，互いにほとんど重複していないゆえ，原『神学』がある時点で少なくとも三者に分裂したとみなすのが妥当である。G. Endress, *Proclus Arabus*, Beirut, 1973の包括的研究によれば，これらはさらに12世紀にクレモナのゲラルドゥスによってトレドでラテン語に翻訳された*Liber de causis*（『原因論』）のアラビア語原典*Kalām fī maḥḍ al-khayr*（『純粋善論』），及びプロクロスの『神学綱要』全211命題中20強の命題が現存しているアラビア語訳の語彙や文体とも共通であり，いずれも9世紀前半のキンディーを核とするバグダード翻訳チームに特徴的なものだという。『ギリシアの賢者の言葉』の拙訳は，『西洋精神史における言語観の諸相』慶應義塾大学出版会，2002年，209–225頁に，『神学論攷』の拙訳は，『慶應義塾大学日吉紀要　人文科学』17，2002年，157–187頁に掲載。

(3)　拙論「アラビア語版『アリストテレスの神学』研究展望」『慶應義大学言語文化研究所紀要』30，1998年，201–217頁参照。

(4)　サンクト・ペテルブルクでの発見がボリソフにより1930年に報告され，再び同所で別の断片がフェントンにより，さらにオックスフォードとニューヨークで保管されているカイロ・ゲニザ写本のうちからも新たな断片が1980年にフェントンによって同定されている。Cf. P. B. Fenton, The Arabic and Hebrew

をフェントンがかなり以前に予告したにもかかわらず，未だ完了していないことによる[(5)]。流布版は全10章であるのに対し，ラテン語版は14章からなるので，『アリストテレスの神学』の「長大版」（longer version）と称されている[(6)]。ラヴェンナのフランチェスコ・ローズィがダマスクスの著名な図書館で発見したアラビア語写本を，キプロス出身のユダヤ人医師モーセス・ロヴァス[(7)]を雇ってイタリア語，ないしは粗雑なラテン語に訳させたものを，ニコラが彫琢することによってラテン語版が成立した。そ

Versions of the *Theology of Aristotle*, in: *Pseudo-Aristotle in the Middle-Ages. The Theology and Other Texts*, London, 1986, pp. 241–264.

(5)　長大版の研究はフェントンの校訂が出版されるまで留保するというのが，世界的な了解事項になってしまっている。たとえば，H. Daiber, Buchbesprechung: *Pseudo-Aristotle in the Middle Ages. The Theology and the other Texts, Der Islam* 65, 1988, p. 133。

(6)　プロティノス『エンネアデス』のアリストテレス主義化が流布版『アリストテレスの神学』ですでに認められるが，長大版はその偏向（改良？）をさらに推し進めているとの印象を受ける。10章から14章にしているのも，アリストテレスの真作『形而上学』14巻の巻数に合わせた結果なのであろうか。

(7)　モーセス・ロヴァスは，ヘブライ語訳をも作成した事実が，フランス国立図書館（BN）ヘブライ語写本996のヨセフ・ベン・シェーム・トーブの『ニコマコス倫理学』註釈欄外に記された残存断片から突き止められている。Fenton, art. cit., pp. 241; 258–9，及びM. Aouad, « *La théologie d'Aristote* et autres textes du *Plotinus arabus* », in: *Dictionnaire des philosophes antiques*, publié sous la dir. de R. Goulet, t. I, Paris, 1989, pp. 565参照。私がパリのリシュリュー通りのBN東洋写本館蔵の現物を閲覧したところ，上記写本には次のような説明が付されていた。« Ce ms. semble avoir été écrit en Espagne du vivant de l'auteur. On y trouve plusieurs notes marginales de la main de Moïse Rovas, médecin juif de l'île de Chypre, que Franciscus Roseus, de Ravenne, chargea à Damas de la traduction des quatorze livres de la Théologie attribuée à Aristote. » ロヴァス訳以外に，少なくともシェーム・トーブ・イブン・ファラケーラー（ca. 1225–1291）によるヘブライ語抄訳の存在も確認されている（Y. Tzvi Langermann, A New Hebrew Passage from the *Theology, Arabic Sciences and Philosophy* 9, 1999, p. 253）。

れをさらに洗練されたラテン語に移したジャック・シャルパンティエの訳もある[8]。流布版が長大版に先行するという説が優勢ではあるが，長大版から流布版に移行したという主張が消えたわけではない。長大版の研究はまだ緒に就いたばかりなのである[9]。

底本には，*Sapientissimi philosophi Aristotelis stagiritae. Theologia sive mistica philosophia secundum Aegyptios noviter reperta et in Latinum castigatissime redacta*, ecphraste Petro Nicolao ex Castellaniis, Roma, 1519を用い，常時*Libri quattordecim qui Aristotelis esse dicuntur, de secretiore parte divinae sapientiae secundum Aegyptios*, per Iacobum Carpentarium, Paris, 1571を参照した[10]。底本のニコラ版は句読点が不正確で誤植も散見されるので，シャルパンティエ版を援用しつつ文脈を解釈しなければならなかった。流布版『アリストテレスの神学』にみられない箇所は太字で明示した。ただし，解釈者の視点の差によって，太字箇所の確定は議論の余地のないもの

---

(8) これらのラテン語訳は，アリストテレス偽書の疑いをかけられつつも，1578年から1654年まで（1578年リヨン版（リプリント1581年），1580年リヨン版，1593年フランクフルト版，1605年ジェノヴァ版，1619，1629，1639，1654年パリ版），『アリストテレス著作集』に所収されて繰り返し出版されていた。最終的にトマス・テイラーによって，プロティノスの著作に基づく偽書であることが証明されるのは，1812年になってのことであるという。このように長らくアリストテレスの正典から外されずに済んだことには，ニコラ版緒言でローズィが述べたもっともらしい仮説が一役買っている。すなわち，『アリストテレスの神学』第九章の冒頭に欠損があるのは，ストラボンが伝えるように，他のアリストテレスの弟子向けの専門著作同様，ネレウスの子孫が古トロヤ近郊スケプシスの地中に紀元前３～１世紀の約200年間，略奪を恐れて隠した結果の虫喰い状態に起因するものだというのである（J. Kraye, The Pseudo-Aristotelian *Theology* in Sixteenth- and Seventeenth-Century Europe, in: *Pseudo-Aristotle in the Middle-Ages. The Theology and Other Texts*, London, 1986, pp. 265–286）。

(9) F. W. Zimmermann, The Origins of the So-called Theology of Aristotle, in: *Pseudo-Aristotle in the Middle Ages: The Theology and Other Texts*, London, 1986, pp. 165; 195; 208は，長大版の成立を９世紀後半と見積もっている。

とはなりえないことをお断りしておきたい。私の立場は，哲学的に重要で長大版に特有な思想を識別できれば，それで充分というものである[11]。[　] 内はフォリオ数である。言うまでもないが，見開きにすれば，r は右頁，v は次の紙の左頁になるのは注意を要する。{　} 内は文意を明確にするための，訳者による補足である。

今回訳出した長大版第三・第四章で注目すべき更新は，第一・第二章でも注目したように，流布版以上に『エンネアデス』の新プラトン主義にアリストテレス的要素を附加している点である。たとえば，流布版の「質料」や「知性」を，それぞれ「**第一**質料」**[15^{v}]**（cf. **[19^{v}]**）と「**可能**知性」**[22^{v}]** へと増幅しているのである。そして，たんにアリストテレス的学術用語を使用するだけにとどまらず，**[17^{r}]** においては，流布版が与えた「肉体の完成」という，魂のいわば省略的定義を，「**器官をそなえた自然**物体の現実態」とすることによって，『魂について』Ｂ巻冒頭のアリストテレス本来の定義を正確に踏襲する文言に書き改めている。もっとも，知性だけでなく魂全体を不滅で離存可能な現実態とすることによってアリストテレスに背き，流布版同様，プラトニスムを堅持する側面も急ぎ指摘しなければ，不公平となるであろう。アリストテレスではその意図が不分明であった船乗りと船の比喩は，騎手と馬の対も加えられて，魂の肉体からの離存性を暗示するものと解釈されるに至る。

魂が睡眠時には肉体から離脱し予言と啓示を受けるという加筆は，長大

⑽　シャルパンティエ版の発刊年は，現物を確認したところ1572年ではなく，1571年である。Fenton, art. cit., p. 241，Kraye, art. cit., p. 266の不注意な瑕疵が，ダイバー（art. cit., p. 134）やアダムソン（P. Adamson, *The Arabic Plotinus. A Philosophical Study of the Theology of Aristotle*, London, 2002, p. 23）にも感染しているようである。

⑾　流布版の方の哲学的意義の一例については，拙論「『アリストテレスの神学』から古代末期の始原論への遡源」『中世思想研究』45号，2003年，41–56頁を参照。

版翻案者の思想的背景を推測させるものとして興味深い。［**23**^{r}］でも，霊的なものどもが神的なしかたで啓示される対象であると言われている。ひと・ものの繊細な内面の洞察を「秘された知恵」（sapientia arcana）と呼び，秘された知恵を考察するこの書物を自ら『神秘哲学』（philosophia mystica）［**22**^{r}］と銘打った著者のうちでは，啓示と神秘的洞察はいかに交錯するのであろうか。

それはさておき，今回訳出した範囲内で指摘すべき最たる革新は，［**14**^{v}］に見られる，神が言葉（verbum）を媒介にして知性を創造したという主張であろう。神と知性の間にべつの存立を仮設しない点では，流布版は『エンネアデス』から逸脱していなかったからである。『エンネアデス』にも流布版にも対応箇所をもたない長大版特有の思想として，創造主と知性の間に措定される「言葉」（kalimah，λόγος）の教説がボリソフ以来夙に指摘されてきた[12]。これはおそらく，万物を命令形「在れ！」（kun）の一言で創造する神の言葉であり，神の意志，力，命令，知と関連するかもしれない。前回訳出した第一章［**1**^{v}］では，その種の「言葉」という術語は見当たらないものの，神と知性の間に「もろもろの叡智」（intelligentiae）が措定されていた。以後の章でも，この新傾向の展開は見逃してはならないであろう。

第三章

第一節：魂は物体ではない

［12^{v}］哲学者に真理を示し，他の人々を探求へと促し，有益な考察を行

---

⑫ Fenton, art. cit., p. 243; Zimmermann, art. cit., pp. 193; 196–206; M. Aouad, « *La théologie d'Aristote et autres textes du Plotinus arabus* », in: *Dictionnaire des philosophes antiques*, publié sous la dir. de R. Goulet, t. I, Paris, 1989, pp. 567–569; S. Pines, La longue recension de la *Théologie d'Aristote* dans ses rapports avec la doctrine ismaélienne, *Revue des études islamiques* 22, 1954, pp. 8–13.

うしるしを通じて，われわれはこれまでに，知性と全体的な魂，理性的な魂，感覚的な魂，そして植物的な魂，さらにまた**諸々の**自然について，それらの序列に沿って，あらかじめ語るべきことを語り終えているのであるから，いまや魂の本質を**以前の様式に則って**説明することにしよう。そこで，魂が物体であると信ずる人々並びに，魂は物体に付帯する合成であり，物体の諸部分の統一であると述べる人々の臆見を吟味することから着手しよう。われわれは双方の人々を非難し，論拠におけるかれらの誤りを暴き出し，この点に関するかれらの臆見のうちで，何であれわれわれの手に届いたものを報告することにしよう。さて［**13**^{r}］，物体に現れる諸活動は，物体そのものによらず，驚くべきしかたで働く力に由来するとわれわれは主張する。これは，あらゆる物体に分量と性質があるが，分量は性質と異なるということから明らかである。というのは，物体が分量なしにあることは不可能である（かれらもこのことは認めているのだが）が，性質なしにあることは不可能ではないからである。また，物体はすべて分量に従属するが，性質は感覚に従属するわけではない。そこで，性質が物体でありつつ，性質が感覚的理拠の圏内に入らないことがどうして可能であろうか。したがって，いかなる性質も物体ではないのであるから，魂が物体であるという臆見は空疎で虚偽である。またわれわれは以前のようにこう主張する，すなわち，あらゆる物体は小部分が除去されると減少するが，性質はもとのままである。なぜなら，一リブラの蜂蜜の多さは，半リブラの蜂蜜の多さに等しくないが，甘さは等しいからである。力は分量が大きくなると大きくなるが，分量が小さくなると小さくなるという議論を，もしだれかがもち出してきたとしたら，むしろその逆，すなわち，小さい物体なのに大きい力があるのを目にするとわれわれは答える。したがって，性質ないし力はそれ自体が分量であるわけではなく，物体や，質料と物体の本性しかもたない**微粒子の集積**とは別の**理拠**（**ratio**）である。さもなくば，性質は機能しないであろう。動物はすべての血液と気息が流れ出たならば死ぬが，もし魂が血液や気息とは異なる本質であるならば，これらが出て

行った場合，動物は死滅することがあろうかと誰かが述べるならば，われわれはこう答える。たとえ体液でなく別のものが動物に生命を与えるのだとしても，動物は生きるために体液を必要としているのであり，体液の動物に対する関係は，魂の物体に対する関係に等しい。それゆえ，魂は体液を支配し，身体の形相に適合させる。身体は分解してゆくので，もし魂が身体をこれらの体液を通じて更新しなかったならば，長く存続することはないからである。したがって，要素が消費されたならば，身体を維持するために魂にとって質料が残っていないのであるから，動物は滅びる。したがって，体液は動物の質料であり，魂は起動因である。これはさらに，動物のなかには血液がないものもあれば，**[13^{v}]** 気息がないものまであるが，それでも，これらの動物にも，そのような｛魂のような｝本性がそなわっていることから明らかである。というのも，動物は魂なしでは存在することができないからである。それゆえ，もし魂が物体であったならば，魂が身体全体にわたって広がり，すべての部分を結合することは不可能であろう。さらに，もし魂が物体の諸要素の混交・混合からなる物体であったならば，魂は要素自体がそうであるように，現実態にではなく可能態においてあることになり，要素自身が混合されると滅びるように，あたかも甘味が苦味と混合した場合のごとく，魂は実体のうえで滅びることになってしまうであろう。また，ある物体が他の物体と混合されると，より大きなものを作り出すが，魂は物体に内在しても，それをより大きなものとすることはなく，**ちょうど同じ大きさのものとして存在する**。また明らかに，物体から物体的部分が引き離されるならば，物体は小さくなるが，魂が物体から分離されると，物体は膨れ上がり増大する。さらに，あらゆる物体は分解しうるが，魂は可滅的ではない。したがって，魂は物体ではない。さらに，或る物体は他の物体と結合しても，その全体に浸透しないが，魂は身体のあらゆる部分に浸透する。また，物体は無限に分割可能であるが，魂は全く分割されない。さらに，魂が物体であると思いなして，あらゆる能動者が物体的であると主張するならば，どの能動者も生成するものであ

るのかと問われる。そして，もしそうであるなら[13]，**或るものはべつのものから生じたことになり，**そうして無限後退するが，これは不合理である。したがって，**或る能動者は第一にして永続的であり**，また，非物体的であることが帰結する。したがって，あらゆる能動者が物体的であるわけではないことになる。**能動者には不生・不滅のものもあるが，物体の形成者である魂もまたそのようであるならば，魂は物体的ではないことになる。さもなくば，魂は確乎としたものたりえないであろう**[14]。じっさい，ある人々は物体が温めたり冷たくしたりといった，さまざまな働きをし，魂も同様にさまざまな驚くべき働きをするのを見て，魂は物体的であると信じたのであるが，かれらは物体が自らによらず，物体性とは異なる力の内在によって活動するということに無知なのである。また，物体もまた己から活動するのだとしても，［**14**^{r}］しかし，温めたり冷たくするといった物体の活動は，思考，考察，欲求，**正義の遵守**といった魂の活動とは似ていないのである。というのは，これらのことを**創出する**力は，物体的な実体とは異なるからである。したがって，先述の臆見の持ち主たちは，精神の活動を物体に帰して，精神自体を無用のものとして放棄したことになる。それに加えて，もし魂が物体的であるならば，肉体に貫入する際，無限の部分を通過することになるが，これは誤りである。たしかに，無限の部分が現実態においてあることが不可能であれば，あるいは，肉体のすべての部分を通過することはないのであれば，魂が肉体全体に貫入することはないことが帰結するからである。ところが，魂は肉体の原因であって，それゆえ，より優れてもいるから，肉体全体に貫入する。魂は非物体的なものであるから，個々の部分を分断しながら貫入するのでもなく，べつの高次の流儀で

---

⑬　si itaの後の疑問符は，文意から，またシャルパンティエ版を参考にしてコンマにする。

⑭　「**魂は物体的ではないことになる。さもなくば，魂は確乎としたものたりえないであろう**」の箇所は，シャルパンティエ版には欠如している。

そうするのである。また，魂は**冷却機能をもつ**自然の気息であって，**或る諸部分の**微細化により**諸要素の混合から**生じたのだと言うならば，これは大いなる虚偽である。というのも，このような**冷却機能を有する**気息なしに魂がそなわる多くの動物のうちでは，要素としての熱が優勢だからである。

第二節：魂は結合体ではない，そして，宇宙の諸事物の秩序とはなにか

自然は魂に先行し，魂は異なる諸々の自然の混合から生ずると言う人々がいれば，賢者の間では最も考えられないこと，すなわち，高貴なものが高貴さの劣ったものに後行するということが帰結する。これは虚偽であり不可能である。というのもじっさい，被造的存在者のうちで知性は第一のものであり，ついで魂，さらに自然が続くのであり，**すべて**下方のものは劣ったものであり，**すべて**上方の**欲求対象**は，より高貴で普遍的である。またさらに，知性は魂に後続するとかれらが言うならば，同じ論拠から至高の創造者が知性より後に存在することになるばかりか，**[14^{v}]** 生成消滅しうることになるが，これは誤りであり，また真なる秩序でもない。さもなくば，魂も知性も他のものも存在しないことになるであろうから。それゆえにわれわれは，神が知性を第一のものとして創造し，他の事物の産出者に仕立てたのだと主張する。**だが，神は知性をなんらかのしかたで言葉を媒介にして（medio Verbo）創造したのである。というのは，神自身と知性の間に言葉以外のいかなる媒介も介在しなかったのであり，たしかにまた言葉は知性に対して｛神と｝協同する作用因となったからである**[15]。だが，知性は魂の原因となり，魂は自然の原因となった。最後に，自然は個々の生成するものの原理となり，**各々のものがその後，他の能動因を媒**

---

(15) シャルパンティエ版の「**言葉は知性と協同する作用因になったからである**」という解釈はとらない。

介にして原理となる。だが，神は以下の理由から，**すべての原因の**創出者である，**すなわち，すべての原因を無から産み出し，それらを普遍的な形相のもとに包括されるように知性に植え付け，その後，時宜に応じてそれらを引き出すからである。それらの力量と秩序に応じて**，ときに媒介を伴うこともあり，或る原因が他のものの原因として介在するとしてもである。**したがって，神はすべての原因にとって，それらが存在するようにし，原因として働くようにする創出者である。ただ，産出するといっても，他の媒介なしになんらかの原因の創出者であるという点で，諸原因とは相違するのであるが。**

第三節：神は存在するか，そして神はどのようなものか

神が存在することの証明で銘記すべきなのは，次のようなものである。すなわち，べつのものが現実態にあるのでなければ，或るものが可能態にあることはない。さもなくば，可能態から現実態に移行することがないであろうから。**じっさい，可能態とは現実態の可能性以外のなにものでもないし，べつのものがその存在の能動者であることはふさわしくないという理由で，自己自身から現実態において存在することもできないからである。なぜなら，能動者は現実態において先行するからである。というのは，或るものが同一の観点で自己自身に先行し，かつ後行するというのは虚偽だからである。**したがって，可能態が現実態へと引き出されるのであれば，なにかが純粋な現実態に――それによって現実化されるような他のものが存在する余地はないのであるから――あるのでなければならない。そして，これこそ**必然的，永続的，転化せず，減少せず，不変の**存在者（ens）であり［**15**r］，またすべての活動はそれから到来するのであるし，なんであれ可能態にあったものは，**それの命令によって**現実態へと転ずるのである。また，それが不変であるというのは産出されることがないからである。なぜなら，**自らの本質上必然的に**，現実態にあるからである。**否むしろ，真なる存在者であり，存在者を超えさえする。存在（entitas）はそれに依**

存し，それにおいて保持され，それへと還帰するのであるから，それがなんらかの可能態においてあるとは想像もできないのである。さもなくば，それは現実態へと導く他のものを必要とすることになるだろう。ところが，それ以外のすべてのものは，現実態においてあるに先立って，可能態においてあると考えられる。なぜなら，欠如は存在（entitas）に先行し，可能性は必然性に先行するからである。他方それは，極めて離存的で真なる存在であるかぎり，減少しないし，他のものどもといかなる共通点で一致することもない。むしろ，万物をつくる能動者であるから，いかなる先立つものにも先行するのである。叙述されるところからは必然的な存在者である。それは不動のものとして，過ぎ去ったもの，現にあるもの，未来のものにわたって，一なる相のもとに万物を知る。というのも，これらのものの創始者であるかぎりにおいて，これらのものを知るからである。だが，諸事物は他のものによって区別されるかぎりで知られるのである。さらに，それは外的ななにかをではなく自己自身を観想することによって，或るものを可能態から現実態に引き出す。つねに不変であるのは，最高の現実態だからである。他方，被造物は可滅的であり，可能態へと還帰するし，生成しうるので恒久的ではない。だが，それは現実態において存在するのであり，可能態においてあるもの――これは可能態においてあった後に，現実態において存在するのであるから――より高貴である。また，可能態においてある存在者は，真の存在者ではない。このように可能的に広義には存在者と言われるにしても，真には存在者と呼ばれることはない。したがって，現実態は可能態より優れていて，より普遍的であること，変容しないものであるかぎり物体的自然・本性とは異なっていること，そして，自然は知性と魂の所産であるから，両者は自然に先立つことが証明された。

第四節：事物はいかなる秩序で，いかなる理拠によって産出されるのか，また，神はいかなるしかたで活動するのか

続いて，以下のことを知るべきである。現実態にある魂は知性から原因

づけられたものであり［**15**[v]］，現実態にある知性もまた第一の**始原**（**principium** primum）によって産み出されたのである。この知性は，産出される事物の総体を知性のうちにもたらす第一の**始原**から受けとった形相と**力**を魂に送り込むのである。さらに，**高貴なる天の自然を媒介にして**[16]魂は**第一**質料だけをめぐって活動し，他方知性は，**媒介なしに**魂をめぐって｛活動し｝，**この同じ知性は魂を媒介にして自然をめぐって｛活動する｝**。というのも，魂は**第一**質料のうちに形相を創出し，また知性は魂のうちに形相を創出するからである。だが，すべての形相が知性に内在するのは，かの**至高の原理**によって**投げ入れられ，植えつけられ，知性と同時に創造された**からである。**さらに，知性は諸形相を魂のうちで保持し，魂は第一質料のうちで諸形相を保持する。というのも，諸形相は知性と魂両者の活動の所産だからである。**だが，これらのものの上位の制作者（conditor）は存在者（ens）であり，**絶対的で真なる善である。**それゆえ，それは諸事物の諸形相を創作（**更新**）することによって（novans），諸事物を存在せしめ，（現実態における真なる存在者として存在するので）万物を本質にしたがって産出する。たしかに，或るものは媒介なしに，或るものは媒介とともにそうするのである。だが，真なる絶対的な現実態として，諸事物及び諸事物の諸形相を創作（**更新**）するに際して，自らの**本質**[17]を眺め，瞬間的に活動する[18]。だが知性は，現実態においてあるが，より優れた**現実態自体すらもっているので**[19]，それから送り込まれる力を

---

⑯　内容の上から，またシャルパンティ版を参考にして，mediante coelesti 前後の括弧は削除する。

⑰　アラビア語のdhātには，「自己自身」と「本質」という意味があり，流布版の踏襲としては前者の意のラテン語を選択する方がより適切であったろう。しかるに，この長大版では「本質」の意に解されている。以後，他の箇所でも同様の偏向が反復される。

⑱　シャルパンティエ版では，「そして，真なる絶対的な現実態として，**その本質にしたがって万物を眺め，**一瞬のうちに完成させる。」となっている。

受けとるのである。またそれゆえ知性は，絶対的な現実態，すなわち，**真なる本質である**能動者に似ようとする務めをやめることがない。そして知性は，**なにかを直知すると，より優れたかの現実態を振り返り**・眺め（**respicit**），完成した業を行うのである。**というのは，あたかもかのもの自身が活動するかのように，知性はそれから送り込まれた力によって活動するからである。**魂も同様に，活動するための**力の流入**を知性から受け取るのであるから，知性自身を**模倣し**，知性を振り返り・眺めつつ活動し，**知性によって他のものに流入する**のである。というのは，**真なる**能動者は，絶対的な現実態であり，**最も完成した本質にして知恵**だからである。そして，このような存在者は，自己**の本質**[20]だけを観想することによって活動する。というのも，**それから発出しなかったもので**，それ以外のものはなにも存在しないからである。**この一者は自己自身によって存在し，他の万物を産出し，産出されたものを導き，持続するように維持するのである。だがまた，それは自己自身から自己自身に向けて，それらを動かす。**したがって，ここまでで証明されたように［**16**r］，知性は魂に先行し，魂は自然に先行し，また自然も生成・消滅するものに先行する。そして，とどのつまりは，**あらゆる能動者と作用の原理として**，制作者が万物に先行する。これは，最初に創造し，最後に完成させる。だが，一瞬にしてとりかかり，**確たるものにし**，終えるのである。**そしてそれは，他のいかなる指図する起動的原因もなしに宇宙を創造した。ところで，他のすべての能動者は，なにか或るものに働きかけるのであるから，必然的にそれだけが，真の能動者であることになる。**

---

⑲　ニコラ版のipsummet辺りに構文の乱れが感じられる。シャルパンティエ版では，「知性は現実態においてあるが，より優れた別の現実態をもっているので」とある。

⑳　註（17）に同じ。

第五節：魂はいかにして可能態にあるのか，そして，それは調和ではない

われわれは本題に戻って，こう主張する。魂は現実態における存在者であるので，それが可能態の存在者であるというのは不可能である。**ただし，次のようにわれわれが考えるのであれば，そう言っても構わない。すなわち，先に述べられたように，魂は産み出されたものであるのだが，すべて産み出されたもののうちには現実態と可能態があり，じっさいに現実態において存在者は減退していると。神自身は，可能態から現実態へ移行するものの原理である。さらに知性と魂は，時間の変転とともに生成しては，やがて消滅することを繰り返す**物体のように**産出されるという理由で**，現実態にありかつ可能態にあるとは言われない。**知性と魂は恒常的にあり，永続的に存在するのであれば。**そこで，先に証明されたのと同様に，このような理由からも，魂は気息でもなく他のいかなる物体でも決してないことになる。それは，少なからぬ人々によってべつのしかたで語られたけれども，今しがたわれわれによって記されたことで満足するがよい。依然として誰かが，魂は物体の本性を超えたなにかだと言い張るとしたら，またわれわれはそれを探求し，それによって魂が記述される，物体のそのような合成とはなんであるのかを探求することにしよう。というのもじっさい，ピュタゴラス派の或る人々は，物体の合成はキタラの合成に似ていると主張したのである。たしかに，（キタラの弦が**正しく**[21]，**比に適って**張られたうえで）キタラ弾きが［**16**^{v}］爪弾くと，キタラが調和を受け容れるように，そのようにまた，諸々の体液が調合されると，肉体全体の真なる複合が生じ，これによって魂が記述されるからである。だが，この言説は不可能であるようにみえる。**その論拠**（強力で分明なものであるが）**に対して**われわれは大いに反駁し答えることにしよう。というのはじっさい，魂

---

(21)　rectae を recte に読み替える。

が**自分に適合した**この種の合成をつくり出したのであれば，**かれら自身も認めたように**，魂は物体の合成に先行するからである。さらに，魂は肉体を支配し，物体的本性にしたがった活動の多くを妨げるが，合成は肉体を支配することもなければ，物体的本性にしたがって活動することを妨げることもない。しかしまた，魂は実体であるが，合成は混和された体液に付帯して生ずるので実体ではない。さらに，肉体の合成が最上であるとき，肉体は健康で**無痛で**あることにはなるが，**魂が最上であっても，つねにそのようであるわけではない**。そのうえ，もし魂が合成であったならば，さまざまな器官にはさまざまな合成があるのだから，一つの肉体に多数の魂が内在することになるだろうが，これは大いに不合理である。以上に加えて，もし魂が肉体の合成であるならば，肉体の諸部分の合成は魂によって生ずるのだから，魂は自己自身によって生ずることになってしまうだろう。じっさい，それはなにか先行するものによって生ずるのであるから，自己自身によって生ずるのではないのである。これはちょうど，**楽器の和音がそれにしたがう**弦楽器の合成がまた，自己自身によるのではなく，音楽家によるようなものである。というのもじっさい，弦楽器は調律されるのであって，自らを調律する――**こんなことは前代未聞のことである**――のではないからである。同様に，もし魂が肉体の合成であって，合成が肉体によって生ずるのであれば，魂が魂ならざるものから生ずることになり，そして**存在者は，たんに相互比較のうえでだけ，先行することになるだろう。だが，形相は魂抜きに産み出されることはない**。さもなくば，**形相が**偶然に生ずることになってしまうであろうが，これは個別的なものにとっても普遍的なものにとっても不可能である。かくて，魂は肉体の合成ではないことになる。

第六節：魂とはなにか

［**17**^{r}］魂は**器官をそなえた自然**物体の**現実態**であり，また，**現実態**は実体に内属するゆえに実体ではないと**昔の**哲学者たちが一致して主張してい

るのであるから，魂は実体ではないことにならないかと言うのであれば，われわれはこのような学説を吟味すべきであると答えよう。つまり，**或るアッティカ人たちは**，現実態のことを別様に「エンテレケイア」と呼んだのであり，また同じ哲学者たちは，魂は物体に対し，形相の質料に対するような或る比例関係にあると言った。ただし，魂が端的な物体であるかぎりの物体の形相ではなく，**器官をそなえ**可能態として生きる**自然**物体の現実態でなければ，魂は物体となろう。**それにまた，物体の現実態は付帯的なものではなく，実体であるとすでに証明されている。だが，「自然物体の」と言われたのは，描かれたもののような人工物からそれを区別するためであり，また，「可能態において生きる」と言われたのは，自然物体ではあるが，可能態において生きるものではない石や鉄やこの類の生命のないものから分かつためであり，さらに，「器官をそなえた」，すなわち，生の営みを行なうための主要な器官である脳，心臓，肝臓のごとき道具をもっていると付け加えられたのである。「現実態」にはまた二義あって，一方は，船乗りが船から，また騎手が馬から離存可能であるような現実態であり，他方は，熱が火から，冷たさが雪から離存不可能であるような現実態である。それゆえ，離存可能な現実態は基体が滅びても滅びることがない反面，離存不可能な現実態は滅びるのである。したがって，魂は自然物体から離存可能な現実態である。というのも，すでに示されたように，物体が滅んでも魂は滅ぶことがないからである。さらに，熱がそれによって火が存在する火の完成であるように，或る現実態は自己の質料の完成であるが，大工が家の完成であるように，別の現実態は完成を導くのである。魂は自然物体の現実態であるが，それの完成は休止しているのではなく，自然物体のうちに，感覚，知性，表象力その他の活動**といった完成を導くからである。というのもじっさい，物体は魂の受肉（animatio）以前には不完全だが，魂は物体的完成ではないからである。**さもなくば，［**17**^{v}］彫像本体が分断されると，彫像の形姿が切り刻まれるのと同様に，物体が分割されると魂は分割可能なものとなってしまうだろう。

第七節：魂は離存可能な現実態である

視覚が眼の完成であるようには，魂は一つの器官の完成ではない。というのは，魂は個々の器官の完成を導くのであり，個々の器官の完成が滅びたとしても，魂が滅びる必然性はないからである。否，魂は魂が内在する基体から離存可能な現実態である。だが，可滅的ではない。というのも，物体的器官を抜きにして，肉体に対立する，良俗の正しい自体的な諸活動をもっており，媒介なしに肉体の全部分を判別するからである。さらに，魂は清められた状態にあり，非物体的なものを観照するときには，器官を介さない活動を行なうのである。したがって，肉体が滅んでも魂の本質が残存することは疑いない。さもなくば，魂の諸活動は本質よりも高貴であることになってしまうであろうが，これは大いに不合理である。というのもじっさい，本質が活動の原因だからである。だが，結果が能動者より優れているというのは虚偽である。また，魂が自然的形相のように不可離な現実態であるならば，いかにして魂はもぎ取られることなしに睡眠中に，予言と啓示を受けることへと肉体から高められるのであろうか。また，覚醒状態においても同様に，魂が自己自身から質料的な様態を除去し，自己の本質に還帰するならば，肉体から浮び上がるのである。だがこれは，諸感覚の休止，その営みの中断ゆえに，とりわけ夜に明らかとなる。さらに，もし魂が肉体がそれによって存在する肉体の完成であったならば，魂が肉体の衝動に抗して肉体を動かすことはないし，認識しないであろう。そして，魂は感覚対象を判別するのではあるが，｛魂と｝似ていないものをも認識するのであるからには，魂は諸感覚と似てはいない。そして，本性の秩序にしたがうならば，諸感覚自体は事物の模像を受容し，魂の方が判別するのである。また，もし魂が物体形相であったならば，非物体的なものを眺めることもないであろう。だがまた，もし魂が自然的完成であったならば［18r］，肉体を欲求に関して反対のものへと動かすことはないであろう。それゆえ，ちょうど肉体の一部と力は，一方が他方に対立することが

ないように，魂は存在するために肉体を必要とし，また逆に｛肉体は｝合成に向けての共同のために魂｛を必要とする｝としても，知に満ち溢れ肉体的な欲求から高められた魂は肉体に対立することがすでに見出されているのであれば――肉体上の棲み家を完成させ，有害なものから開放する結果，魂にしたがうものを魂は憎むことなく，その他悪しき作用を蒙ることもないゆえに，たとえ良俗をそなえた魂が，ときにその良俗を肉体と共有するとしても――，いかなる理由によってまた魂は以上のような完成なのであろうか。そして，肉体の能力は40歳から衰えるが，魂の力は増大するのではないか。さらに，獣はいかなる知もなく自然的本能によって支配されるが，人間は本性のこのような導きに｛支配されることは｝決してないのであるから，人間の魂は獣の魂のように自然的完成ではない。さもなくば，人間が規律に服することはないであろう。というのはじっさい，魂は以前は形相づけられておらず，ただ形相づけに適合していたにすぎないのに，教えを受けたならば，そういう魂によって人間は導かれるからである。しかしまた，もし人間の魂が獣の魂のように完成[22]であったならば，人間は他の実体によって舵取りされることは不可能となるだろうし，他の実体にしたがうこともなく，獣さながら，物体とは異質の隠れた諸形相を眺めようと求めることもないであろう。さらに，あらゆる色を受け容れる空気が，いかなる色も欠くように――というのもたしかに，なんらかの色をもっていたならば，他の色を許容しないであろうから――水もそうであり，眼もまた，もしなんらかの色を含んでいたならば，残りの色を容れることはないであろう。聴覚も嗅覚も他の諸感覚も同様である。そのように人間の魂もまた，あらゆる物体形相を受容し判別するからには，これらのいずれでもないし，じつに人間の魂は獣のごとくに物体的形相を一般的（communiter）かつ不明瞭に受容し認識するのではなく，色や匂いのよ

---

(22)　perfectiは，［92^{v}］の正誤表及びシャルパンティエ版にしたがって，perfectioに読み替える。

うに，特定化して（specialiter）識別し，また，固有の理拠によって明瞭かつ限定的に把捉する。こうして，人間の魂は獣の魂とは違って自然的形相でない**ことは充分に証明されたのであるが，それはとりわけ，もし［18^{v}］そのようであったならば，肉体の衝動にも傾きにも抗することなく，肉体に従順であることになってしまい，肉体を支配することもないだろうという理由からである。**それゆえにまた，肉体に刻印がなされたならば，その刻印は魂にも**似る**であろう。そして，もしじっさい，**肉体的現実態という状態は，感覚を超えることはなく，**思考し反省する力**（これすなわち，或るものからべつのものを手繰り寄せることによって，既知のことから未知のことを知ることである）**も肉体に付随しないならば，人間はたんに感覚するものであることになるだろう。そして，魂の物体性を思いなした人々はこのことに予め気づいたがゆえに，べつの魂とべつの不死の知性が存在し，この魂は自然的受動的なものの完成としての現実態ではなく，完成——すなわち，**可能態において生ける，器官をそなえた自然物体の現実態と言われ**，｛肉体に｝受けとられた一つの魂——を創出するものであると言うことを余儀なくされたのである。だが，われわれに言わせれば，理性的な魂の上位に**人間を舵取る**別の魂などないのであるし，**自然**物体を完成するがゆえに，それを哲学者たちが現実態と呼んだのである。

第四章

第一節：神とはどのようなものか

肉体に打ち勝ち，諸感覚と**質料的**情動を鎮め，**表象力を浄化し**，知性**の実体（substantia）**[23]へと還帰した者は，その自己の壮美（dignitas）を認

---

(23) アラビア語のdhātには，「自己自身」と「本質」という意味があり，『エンネアデス』と流布版では前者の意味が文脈に沿っていた。しかるにこの長大版では，「本質」の意に解され，さらにここではsubstantiaの訳語が与えられている。

識するであろう。それは，**知性の確実性と知性の至高のイデアにしたがって**，知性界を眺める力をもっているということである[24]。**至高のイデア**とは，諸々の光の光，**諸善の善，諸々の壮美の壮美，諸存在の存在（entitas），非存在者を超えた存在者（ens）自体であり，これはまた，自己自身の希求であり［19r］，それによって万物が存在し持続する始原であり，本性的に欲求する万物が，模倣された形相である固有の本性によって，それへと動かされる欲求対象である。したがって，本質の受容された刻印によって産み出されるように，万物はその運動によって存在する。というのも，自然的実体は固有の本性によって存在するが，これは形相に基礎づけられているのであるし，形相は己の範型の模倣に基礎をもつことからすれば，万物がその範型を欲求していることになり，欲求するならば，それへと動かされるのであり，動かされるのであれば創出されていることになる，とすでに他の箇所で証明されたからである。それはまた，全面的に不動である一方，それによって万物が存在する運動でもって万物を動かし，それの上には他の起動者が存在しない一なる起動者に至るまで動かすのである。それゆえに，この第一の制作者（conditor）は，万物にとってその本質と持続の始原であって，それなしでは，いかなるものも存在することはないであろう。**

第二節：質料も神によって産出されたこと，神へと動かされること，そして，それはいかにして証明されるのか

運動は希求によって生ずるのであるが，すべての自然的形相がそこへと分解する実体には希求が内在しないという理由から，その実体には先述の

---

(24) 「知性の確実性にしたがって知性界を眺め，そして至高のイデアを眺める力をもっているということである」とも訳しうる。その場合は，知性界の上位に，それより一段高い至高のイデアを措定することになり，流布版及び『エンネアデス』の立場と齟齬を来さなくなる。もっとも，始原を「イデア」と形容することは，プロティノスの容認するところではないのであるが。

固有な運動は属さない，と或る人はおそらく言うであろう。可動的でないものは，本質に関して産出されたのでもない。結合体が産出されるのである。むしろ，それはすべての運動の原因なのである。そういう人に対して，そのような見解は誤っているとわれわれは答えよう。つまり，他の万物がそこへと分解する第一の単純なものは，それによって事物が存在する固有の形相一切を欠くわけでは決してない。さもなくば，諸形相の空虚となって，存立しえないであろう。否，或る形相が消え失せても，べつの形相に交代する。だから，すぐさま第一の起動者から形相を受け取って，それ自体はまた創出されることになる。それゆえにこれまで知者たちは，第一質料は形相の受容という運動によって動かされ，眼が視覚を，女が男を欲求するように，不完全なものが完成を欲求するごとく，形相を欲求すると述べたのであった［**19**^{v}］。それゆえまた，形相を受容することへの欲求である運動によってそれは動かされる。そして，諸形相を受容できるということが，第一質料が存在者であることの根拠なのである。したがって，もしそういった受容する本性が取り去られたならば，それは存立しもしなければ，理解されもしないであろう。また，もし基体はさらに他のより単純な基体へと分解すると主張するならば，その主張は起動者への無限の分解についての主張のようなものとなるだろう。したがって，第一質料も完全な現実態である運動によって存在する。これは，或る形相からべつの形相へと無限の連続的変容によって表象されるが，形相の受容とともに始原が不可欠である。その証拠として例を挙げれば，固体がいかなる先行形に対してもさまざまに形態変化することがある。したがって，他のすべての実体は，本質と存在と持続に関して創出者としての第一能動者――これは第一の普遍的起動者である――をもつこと，また，すべて可動者はそれに向かって動かされること，また，運動によってつくられたものはすべて，また運動によって持続するということがすでに証明された。それは，運動は可能態においてある存在者の現実態，すなわち，現実態へと移行するものの完成，移出だからである。

第三節：再び，神はどのようなものであるか，そして，時間的に他のものに先行するのではないこと

第一の制作者は，不動のものとして，無限に先行する，世界の創始者である。というのは，そうでなかったのに，後になって或るとき，そのようであるということはないからである。個々の存在者の終局かつ始原であり，能動者の現実態に対するあらゆる点での先行性において先行するのであるが，それは事物がそれによって生じ持続することに他ならないのであって，それが時間上先行するということをわれわれは述べているのではない。さもなくば，われわれはそれを大多数の存在者よりも卑しいものとすることになるだろう。じっさい，両者とも時間のもとに包摂されているのでなければ，或るものが他のものに時間上先行することはないからである。だが，このことはそれには不可能である。というのも，それは万物の原因だからである。否，諸々の単純実体にすら不可能なのだから，況んや至高の神については不可能である。たしかに，時間は本性上，時間の原因である魂，知性[20r]，諸々の単純実体より下位のものだからである。というのもじっさい，もし世界が或るとき存在せず（そうすればまた，無限の時間が先在したことになるが），その後，存在へと進出したとするならば，世界の産出へと駆り立てる上位の協同創始者を神はもっていたことになる。しかし，このようなことを神に帰することなきように。また，もし世界が無限の時間，存在しなかったとわれわれが言うのであれば，世界の産出を妨げるなんらかの高次の原因があったことになる。もしそうであったならば，それらより上位にさらにべつの原因があらねばならないであろう。だが，神は知性や魂よりも優れているのであるからなおのこと，これが神に妥当するのは不合理である。記述し考察することによって，神の至高性，偉大さを{説明しようと}[25]意図し努力しても，われわれは少しもそれに触れること

---

(25)　シャルパンティエ版に基づいて，explicareを補った。

ができないであろう。確かに，その本質と存在は，他のすべての個々の存在者を，刻印されたもの（sigillata）も，依存するものも超えている。それらのうちで第一に知性を，そして，知性の下に魂を，そして，個々の生成するものを神は自己の本質によって産出したのである。それゆえ，最下の人間の権能は，神を把握する力がなく，神のいかなる属性を知悉するにも役立たないのである。

第四節：知性界の壮美はどれほど大なるものであるのか，また，いかなる理由でそれが知性界に帰されるのか

知性の壮美と知性界の高貴さを，そしてまた，上昇して（**本質に即して**）それを考察するための方策はいかなるものかを，今しばらくわれわれの能力に応じて記述することにしよう。そこでわれわれは述べるが，知性は**すべての角度，広さ，直線，外周，その他，円や他の図形に対して想像しうるあらゆるものを含む円の内なる点のようなものである**[26]**。これ自体は不可分であり，広がりをもたない。円のすべての直線はそこに端を発し，同じところへ回帰する。それゆえ，それは中心と呼ばれている。また，その内部に端を発するすべての直線を［20^{v}］包括し，繰り返し引き出せるように，世界のいかなる図形も植えつけられたものとして保持しているものが，円と名づけられている。だが，知性は他の諸々のかたちを含む円の内の点のようなものだと言われるときに，知性についてのわれわれの知は同じ知性から汲み取られるのであり，起源においてわれわれに忍び込むのだと理解される。それが不可分だと呼ばれるときの意味は，われわれの魂と接合しているがゆえに，知性は他のものどもを認識するのにその本質で充分ではないということである。それゆえまた，下方の諸実体から変化させられることはなく，それの知は第一の真の能動者に発する。そして，個別**

---

(26) シャルパンティエ版では整えられているが，この辺りのニコラ版には構文の乱れが見られる。

的な魂の像は，自己自身に還帰したものの叙述・思考への最小限のしるしである。さもなくば，普遍的でなくなるであろう。そして，知性に植えつけられている理拠に適合するようななにかがここに存在することもないし，それの表現であるようななにかがあることもない。それゆえまた，それを洞観するにふさわしい判断も範型もわれわれは欠いているのである。以上の結果として，この上なき本質そのものであり，純粋で，光と名誉と偉大さに満ち溢れ，その世界が一切のうちで最も高貴であるような，その創始者についてのわれわれの思弁はどのようなものになるのであろうか。そこでわれわれは，それを観照するために上昇する際，基づく根拠をとりわけ明示しながら，知性の栄誉と知性界の壮美をわれわれの方策の力及ぶかぎり，露にするつもりである。さて，これらの世界は，知性界が感性界**より上位にある**という関係にある。つまり，前者は後者の原因であり，力を注ぎ込むからである。一方は見事に彫刻されているが，もう一方は成形されていない二つの石がこれらに対する例となる。というのはその場合，一方は他方より完全だからである。両者とも石であるのだから，それは前者が石であるかぎりでのことではなく，成形されているかぎりでのことである。その巧みは質料には内在せず，石に彫られる以前に工匠のこころに概念があったのである。巧みは彫刻家に優れて内在しているのだが，決してかれが眼や手足をもっているかぎりのことではなく，彫刻家が**それによってなすべきことを判断する**技藝に熟練しているからであり，**普遍的形相はかれに内在しているからである。**かれは**個別的**形相をつくり美しく{する}[27]。**それらは一なる本質をもっているのだが［21ʳ］，諸々の材料によって多数となり，普遍的形相は不滅であるのに，こちらは消滅する。**したがって，工匠のうちの巧みは作品におけるそれより優れており，後に石に生ずる形相と本質のうえで同一のものが，工匠のうちに先在するのではない。否，工匠におけるかの形相は確乎としてとどまるのに，かの形相か

---

(27)　シャルパンティエ版に基づいて，redditを補った。

らべつの形相が質料へと発出する。彫刻家の作品は最下のものであり，その出来は工匠の努力に沿わず美しさが減少するが，それの模倣に関して忠実度に差があるのは，質料の受容力に左右されるからである。また，形相は質料のうちで単一であり不可離である。そして，もし一つの基体からべつの基体へと移されたならば，形相はなおいっそう脆弱になるであろう。それゆえ手短にまとめるならば，能動者はすべて，基体より優れている。というのも，後者は制圧され，前者は制するからである。また，どんな範型も写しより優れている。というのは，善き**個別的**形相は**普遍的で**先行する高次の形相に由来するからである。人工的な諸形相は，工匠の魂のうちにある形相から派生する。**そして，後者は大理石のうちにつくり上げられた形相より優れている。**というのもじっさい，技藝自体，しかと持続的であろうとするならば，知性を振り返るのである。というのも，これも必然的に同様であり続ける自然に倣うからである。というのは，他のもの，すなわち上位の知性を模倣するからである。なぜなら，工匠は活動するとき，たんに具現した巧みにしたがうのではなく，作品をより美しくするために上昇して自然から模像を受けとるからである。そして，はからずもかれが模す自然的形相が不完全である場合，知性的なものを模倣して完成させるのである。ただし，受容する質料の適合性に応じてのことであるが。もし工匠がジュピター/ゼウスの像をつくろうと欲したならば，いかなる可感的形相を眺めることもなく，表象力（cogitatio）[28]によって上方へと進みゆき，なににもまして美しい姿にそれを描くのである。そこで，もしジュピター/ゼウス御自身が自己を眼に見えるようにつくったならば，その工匠が表現したのとまさしく同じ似姿で表現なさったことであろう。

---

(28)　流布版『アリストテレスの神学』の「表象力」（tawahhum）に合わせて，cogitatioを「表象力」と訳す。第二章第二節，第六節でwahmに合わせてcogitatioを「表象力」と訳したのと同様である。

第五節：なにに基づいて技藝と自然は美しい形相をつくるのか，また，美はどこに存するのか

［**21**^{v}］ここでわれわれは，いかにして技藝と自然が質料の能力と力**を超えて**，美しい形相をつくり出すのか説明しなければならない。そこで第一に，動物たちの美は血液そのものには基づいていない。同じ種の（**近接的な**）すべての**個体**において，血液は類似のものであり，いかなるものも別様には見出されえないからである。そして，それらの動物は，同等に美しいのでもなければ，血液がまたどんな動物の種でも均斉を維持するのでもない。というのも，**有血動物もいれば，異なる動物もいるからである**。それでは，いかにしてすべての動物が同等に有血とはかぎらないのに，等しく美しくありえようか。さらに美は，**喜びを与える**中庸の色や形に基づいている。ところで，血液は単純なので，動物の質料としてあるのだから，形づくられることもなければ，**喜びを与えることもない**。したがって，美の理拠ではまったくない。さらに，女の見目形のよさが，ギリシア人と敵たちとの長年にわたる大戦争のきっかけとなったのであり，視覚がその外観にけっして飽きることのない人間が麗しいのだと知っている人が，**受けとられた善の光をまとった人**なのである。**知性的なものどもの**美がまたどこから来たるのか，**その人は最後に知るのである**。というのもじっさい，非難の余地のない，えも言えぬ人間の姿でおそらく眺められることになるであろうから。そして，人工的な形相が工匠に由来するように，その形相は能動者から**基体**へと進み出たのである。以上のとおりであるならば，人工的な形相はよきものではあるが，その**基体**が**第一**質料である自然的形相の方が優れている。また，能動者の力のうちに存する形相は，この第一の形相の下に質料はないのであるから，さらに優れている。美が基体から到来するのではないことは，さもなくば，基体が大きくなればなるほど，美がより大きいことになってしまうという理由から明らかである。ところで，ときに小さい物体の形相が大きな物体の形相に劣らず，いやおそらく大き

な物体の形相以上に視覚を喜ばせることをわれわれは眼にする。まさにそれゆえ，物体は美の理拠ではなく**土台**である。その論拠は物体なしでは美は見られず，物体とともに忍び込むと［**22**[r]］認識されるからである。それは視覚を通じてわれわれのうちに忍び込むが，すでに証明されたように，視覚はまた形相だけを考慮するのであるから，美は魂のうちにだけ存するのであり，基体の大小は美が知覚されるのを妨げることはない。**そして，知覚された美と同時に随行するものとして，それらも認識される。**また，能動者は高貴であるか，卑しいか，その中間であるが，もし中間であったならば，片方を産み出すことはない。というのも，どちらをも｛中間のものに優先して｝創り出すことはないからである。また，もし能動者が美しかったならば，その作品は美しいであろう。もし自然の作品が美しく現れたならば，**知性は**より美しくあらねばならない。ところが，自然の美しさはわれわれに隠れている。なぜなら，われわれは表面的な美に感嘆して諸物体の内側を注視することがなく，外側だけを眺めるからである。したがって，もしわれわれが内面的な麗しさへ入り込もうと努めるならば，外面的なそれは卑しいのであり軽視すべきである。というのもたしかに，肖像が不在の作者の認識へと，観るひとをして駆り立てるのと同様に，**内的なものが本性の高貴な知性を動かす**からである。それゆえに，諸物体の内側が知性を動かすのであれば，それらに美が宿るのは自然と知性からであることが明らかに帰結する。また，じつに多くの非質料的形相は美しい，たとえば，数学的な直線図形，女性の鏡像，**魂の指標・類似物であるがゆえに**魂の**諸概念**がそうであるが，これらがたしかに美しいのは明らかである。またさらに，もし君が正しき人をただ外面的にのみ見回すならば，かれの美しさに気づくことはないであろうし，かれを醜いとみなすならば，君は真実からはずれて判断し誤ることになるだろう。つまり，もし君がそのひとの心内を覗きこむならば，端正であると正当にも述べることになるだろう。というのも，真の綺麗さとは内面に宿るものだからである。じつに多くの人々は，無知が支配し知性が沈められているがゆえに，外面的な美を

欲する。それゆえまた，かれらは内的な美に達することがない。その結果またかれらは，秘された**知恵（sapientia arcana）**を考察対象の繊細さゆえに求めることがない。われわれはそのような**｛知恵｝**を**『神秘哲学』**と題したこの書物で記したのである。大衆がこの哲学にふさわしくない**[22ᵛ]**のは明らかであるし，それに達する天稟もないからである。つまり，もしだれかが美は物体のうちに見出されると言うならば，われわれはまたこう主張しよう。その美は自然に属するのである。だがたしかに，自然の麗しさは魂から進み出てくるのであるから，魂にはより優れた美が存している。

第六節：魂の美はいかなるしかたで認識されるのか，そして，神は本質によって活動すること

正しきひとの魂の美がとらえられるのは，そのひとが**質料的な諸性質**から離れて，自己自身をまた**有徳で**[29]好ましい行ないで飾り立てたときである。というのもじっさい，そのとき第一の光がそのひとに己の光線を注ぎ込み**刻印し**，かれの魂を照明すると，魂はその状態で自らの綺麗さを見出し，それがどこから到来したのか知るのである。だが，知性を通じて認識したのであれば，**このことを示す**他の**知**を必要としてはいない。ところで，第一の光は魂には内在せず，むしろ，己の本質のうちに[30]ある。それゆえに，あらゆる属性を除外し，知性を媒介にして魂に流れこむのである。**さもなくば，すべての能動者が**――他のものは[31]内在する属性によって活動するのであるが――**本質によるのではないことになるからである。**というのもじっさい，第一等の能動者は，（それに内在しないし，**それのうちではいかなるしかたでも多数化されることはない**ような）[32]属性によって働くの

---

(29)　probrisは，probisと読む。

(30)　ここも「自己自身」の意のdhātをesssentiaと訳した結果，「それ自身のうちにある」という意味からずれたと考えられる。

(31)　reliquaeは，reliquaに読み替える。

ではなく，本質によって活動するからである。それゆえに，知性と魂の第一等の美の主たる能動者・創出者なのである。つまり，**一である**第一能動者は，全くもって**多数化されることもなく，**変化することもなく，**他のものからいかなるものも受けとることがない。ところで，他のものはすべて，それから受けとらずにいることは不可能である。また，能動者はすべて，他のものと結びついて，形象において他のものに対して活動するのに，第一能動者は基体なしに自らの本質の力だけで働く。それゆえまた，時間的ならず永遠的な知性と呼ばれているのである**[33]**。というのも，かのものには理性的な探求も可能知性も内在しないからである。**ところで，われわれはそれの可感的な例を付け加えておこうか［**23r**］。否，それは可変的な事物からとられたものであり，それゆえまた，永遠的な事物に似ていないから，主題に適合しないであろう。したがって，知性的な例に取り替えなければならない。つまり，他のものを示さんとする一片の黄金が不純である場合には，**端的にか条件的にか予め**純化されるように，｛そして，｝真の黄金は表面的にそれと現れるものではなく，あらゆる属性でもって**内面的に**記述されるように，まさにそれと同様に，いまやわれわれはなすべきである。知性の似像を通じて[34]第一の**本質**を示そうと努めているのであるから。そのためにわれわれは，最善のしかたで[35]清められた知性以外受けとらないようにすべきであって，その知性を知ろうと君が努力するならば，霊的なものどものうちに求めるべきであろう。まことに霊的なものは，純粋でえも言えぬほど優美で，それゆえまた，すべて知性的なものとしてあるからである。君がこれらに対する観想者となる暁には，君はこれらに酷似し

---

(32) ad id の後の閉じ括弧は，次行の multiplicantur の後に移動する。

(33) 流布版では，第一能動者がつくる知性，すなわち，プロティノスにおける第二ヒュポスタシスが「永遠的な知性」と呼ばれていた。ここから次の文でも主語が流布版と長大版では，ずれることになった。

(34) シャルパンティエの解釈では，「似像としての知性を通じて」となる。

(35) optimae は，optime と読む。

たものとなるだろう。また，正しいひとを君が眺めようと切望するのは，そのひとが肉体においてではなく，知性において美しいかぎりでのことであろう。というのもじっさい，霊的なものどもは不断・不変に，虚偽を交えず直知しているのであるから，その美は最大なのである。それゆえまた，**人間によって見出されたものとしてではなく**，神的なしかたで**啓示されたものとして**知られている。そしてそれらは，知性的な力以外のいかなる力も眺めることができないほど，卓越して聳えているのである。

第七節：霊的存在者の形象について

霊的な本質にもたしかに若干の下位の種がある。**その或るものどもは，天上的なものであって，とりわけ星自体のうちに座を占めている。というのも，それらの活動は星において現れるからである**[36]。また或るものどもは天上的であるが，隔たりなく天圏全体にわたってある。というのも，それらは非物体的であり，**星のみならず天球全体を差異なく監督している**からである。かの可知的世界にないものが，この可感的世界になにかあるかと尋ねられたとしたら，われわれはこう答えよう。そこには，**諸々の**天[37]もあれば，大地も海も獣たちも植物も人間もある［**23**^{v}］，要するに，この地にある一切合財がある，ただし，そこに存在するものはどれも地上的ではなく，また，そこにとどまる諸霊は，同居する人間たちと和らぎ合っている。というのも，或る者がべつの者を駆逐することもなければ，べつの者によって駆逐されることもなく，お互いに敵対しないからである。すべての者が友好状態で共に安らいでいる。以前｛述べた｝ように，**かれらの創始者が唯一であり，本質において類似している**[38]からである。そして，かれらは生成消滅せず**存立するものども**を観想し，個々の者が自らの本質

---

(36)　流布版にはないが，もとの『エンネアデス』には，同一のものを指示しているか不明であるものの，こちらの下位種への言及がある。

(37)　シャルパンティエ版では，単数形である。

を他のものの本質のうちに見つめているからである。というのも，そこにある諸霊は透明で，決して**内側が**暗いということもなく，さらにまた，**接してもいなければ離れてもおらず**，それらの各々の光は他のものにとって明瞭であり，なんであれ或るものに属するものが，他のものに隠れていることもない。というのもじっさい，これらのものの眺めは物体的･表面的･可変的な眼を通じて**色を受容することによって**生ずるのではなく，知性的な眼を通じてだからである。それは第六感覚として，器官によって区別される五つの感覚能力を一なる感覚へと共有させるのである。じっさい，知性的な円の中心と，その中心から円周に向かって進み出る線との間に，いかなる測定可能な距離もないのである[39]。

---

(38) シャルパンティエは，「自己に類似している」と訳している。

(39) 以上の未開拓のテキストの開墾に同行し助けてくれた慶應義塾大学大学院修士課程の戸塚裕，早稲田大学大学院博士課程の米山基の両君に感謝する。本研究は，2004年度から始まった慶應義塾大学言語文化研究所･共同研究Ｂ方式「中東の一神教風土における哲学的伝統の受容と変容」の成果の一部である。